「松山の授業モデル」について―学習の振り返り―

松山市教育研修センター事務所

Ｑ　なぜ、「学習の振り返り」が必要なのか。

○　子どもも教師も一人一人が元気になって、次もまた頑張ろうと思えるようになるためです。授業モデルでは、そのことを、「学習の成果や自らの成長に手応えを感じ、他者と共に学ぶ価値を実感する」と述べています。

○　反省だけで終わるのではなく、明るい展望や更なる意欲につなげることが大事です。

Ｑ　「学習の振り返り」とは、何か。

○　子ども一人一人が、学習の目標の実現（学習課題の解決）状況を確認し、必要に応じて自分の学習の成果や問題点を探ったり、改善策を見いだしたりする活動です。

○　教師にとっては、指導のねらいの実現状況を把握し、それによって、子ども一人一人あるいは全体に対して必要な働き掛けを探り出す営みでもあります。

○　授業は、子ども一人一人が資質・能力を育む（そのために、教師は指導のねらいを実現する、子どもは学習の目標を実現することを目指す）営みですから、この営みを十全に行うためには、それがどれぐらい叶ったかという実現状況や達成状況を、適時、的確に把握するとともに、必要によっては問題点を探ったり改善策を講じたりすることが必要です。この活動が、「学習の振り返り」です。

○　「目標と指導・評価の一体化」の「評価」、また、ＰＤＣＡサイクルのＣ、あるいはＣとＡに当たる活動です。

Ｑ　「学習の振り返り」は、毎時間しなければならないなのか。

○　本時の目標がある以上、その実現状況を把握するのに、基本的に毎時間、学習の振り返りはあると考えます。しかし、単元の学習過程の中には、活動のまとまりとして振り返った方が実効的なこともありますから、必ずしも毎時間ということに縛られるものではありません。

Ｑ　「学習の振り返り」は、授業中、どのタイミングで行うのか。

○　本時の目標の実現状況を把握する振り返りのタイミングとして多いのは、授業の終末段階です。しかし、授業の中程で振り返りをさせ、更なる意欲を喚起させたり、学習改善を促したりする場合もあります。「学習の振り返り」という活動を、何のために行うのかという目的によって、タイミングは様々です。

Ｑ　「学習の振り返り」で留意することは何か。

※　研修センター作成動画（令和２年公表）参照

○　振り返りをする目的、目的に適う内容と方法を考えて行うことです。

○　振り返りをする目的には、次のようなことがあります。

・　学習改善や新たな学習展開を促す。

　子ども一人一人に学習の目標の実現（学習課題の解決）状況を確認させ、自分の学習の成果や問題点を自覚させたり、改善策を見いだしたりする活動を通して、自己肯定感や更なる学習意欲を高めます。

自分の学習を見つめることによる新たな気付き（新たな課題の発見等）を基に、学習計画の変更等、新たな展開へといざなうこともあります。

・　指導改善に活かす。

指導のねらいの実現状況を把握し、子ども一人一人あるいは全体に対して必要な働き掛けを探り出します。基本的に、本時に目指した資質・能力の育ちを評価する規準に基づいて「学習の振り返り」をさせます。

・　総括評価・評定につなげる。

予め計画していた単元の評価計画に従って、多様な方法で行った「学習の振り返り」による評価を、学習指導要領等の考え方に基づく各学校の取り決めに沿って、総括評価や評定につなぎます。

【参考】

指導要録の改訂と学習評価の変遷等（概要）

昭和２３年　評価の客観性　→　正規分布による相対評価の導入（５：７％、４：２４％、３：３８％、２：２４％、１：７％）

昭和３６年　絶対評価を加味した５段階相対評価

昭和４６年　絶対評価を加味した相対評価　→　配分比率は正規分布でなくてもよい。

昭和５５年　観点別学習状況評価の導入

評価項目の最後に「関心・態度」

絶対評価を加味した相対評価（小低学年は３段階、小中学年以上は５段階）

平成　３年　新しい学習観・学力観（知識偏重からの転換、個性重視、学習者主体（指導から支援へ）など）

観点別学習状況評価の重視

評価項目の最初に「関心・意欲・態度」、以下、「思考・判断」「技能・表現（または技能）」「知識・理解」

平成　５年　新しい学力観に立つ教育と評価は一体　→　評価規準の設定

平成１３年　「生きる力」の育成

目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）

総合所見等では個人内評価の重視

指導と評価の一体化（指導に生かす評価の充実、学習指導の過程における評価の工夫（学習の結果に対してだけでなく））　→　評価規準の作成（評価基準との違い）

３段階の観点別学習状況評価

評定（総括的な評価）は、小３段階・中５段階

平成２２年　目標に準拠した評価（(いわゆる絶対評価）の文言が削除）

「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」

ＰＤＣＡサイクル（学習評価は成績付けのためだけでなく指導改善に生かすもの、観点別学習状況評価は日常の授業でも適切に実施）

評価規準や評価方法を明確にした評価計画の組織的な作成

自己評価や相互評価は児童生徒の学習活動で、教師が行う評価活動ではない。

平成３１年　※　研修センター作成動画（令和２年公表）参照